2021 年6月 27 日 久宝教会 聖霊降臨節第 6 主日礼拝

メッセージ「思い悩むな!」 水谷憲牧師

聖書 マタイによる福音書 6章 25−34節

「スローライフ」という言葉が聞かれるようになって、もうずいぶん長くなりました。それはもともと、「ささっと作って、ぱぱっと食べちゃう」というハンバーガーに代表される「ファーストフード」文化に対する批判から、「スローフード」という運動――「生産者を搾取することなく、環境に負荷を与えることのない育て方をした食材で、もっと体に優しくておいしい物を」という食文化を目指す運動――が始まり、そこから、単に食べ物だけにとどまらず、暮らしていく場所――都会暮らしから田舎暮らしへ――、交通手段――自転車や徒歩の奨励――など、生活様式全般をも見直していこうという「スローライフ」となっていったようです。この「スローライフ」の「スロー」の大事な要素として、「3つのS」というものがあるのだそうです。それは、「ゆっくり(Slow)」「小さく(Small)」「続けられる(Sustainable)」ということ。日常的に様々なストレスがたまりやすい環境にある私たちには、スローライフの試みは有効かもしれません。しかし、スローライフに魅力を感じても、なかなかそうできない人もいるわけです。この資本主義社会、効率・高速社会にあって、のんびり仕事をしていると、そんな無駄な人材は不要だと会社を辞めさせせられてしまうかもしれない。月々の支払いに子どもの学費……、「ああ時間に遅れる!」そんなことを考えていると、スローライフなんて言ってはおれないという人もたくさんいることであろうと思うわけです。

もう 20 年近く前になりますが、私が妻と結婚式を挙げたとき、写真撮影をして下さったあるカメラマンの方がこんな話をしておられました。彼は写真が大変好きで、好きすぎたあまりに仕事を辞めてプロのカメラマンを目指したのですが、彼には妻と2人の子どもがいたにもかかわらずそんなことを始めてしまったので、たちまち月収が10万円を切ってしまったのだそうです。そのことで彼はいつも奥さんとけんかをしていたといいます。そんな日々の中である時、彼ら夫婦は「けんかをいくらしても貧しさは変わらない。どうせ貧しいのなら、笑って暮らそう」という結論に達したのだそうです。そしてその少ない月収の中で、彼らは生活費を切り詰めるために試行錯誤した挙句、例えば洗剤一つ買う時にも、台所やトイレやお風呂、洗濯など多くの種類を揃えなければいけなかったのを、大豆が原料のある洗剤であれば、それ一つでまかなえることを発見したり、食事のメニューにおいては肉や魚が買えないために食事を野菜中心に、皮や葉っぱなどもすべてを無駄なく使うようにしたの

だそうです。そうしているうちに、奥さんは安全に全てを食べることのできる野菜、つまり有機農法にも関心を持つようになって、最終的に料理の先生にまでなっちゃったんだそうです。生活がどうしようもなく困窮した中でも笑って暮らそうすることで、家族に笑顔が戻り、様々な気付きも与えられ、新しい道まで開けたのだ、ということでした。

まあすばらしい話ですが、しかし、「笑って暮らそう」「生活スタイルを変えよう」とは言っても、そんなに簡単にできることではない。彼らが結果的に笑えるようになるまでには、本当に多くの様々な労苦が、まさに苦しみがあったことでしょう。近藤裕さんという人の『＜ジョイ＞の法則』という本によると、「楽しく生きる」ということは楽をすることではない。楽していたら楽しく生きられない。楽しく生きるためには、しなければならないことがいくつもある。しかしそれを、辛いと思ってやるんじゃなく、楽しみながらやるのだ。しなければいけないこと、それは自分が変わるためのもの、自分が成長するためのものだから、その変化、成長を期待し、体験できるから楽しいのだ。「楽しく生きる」ことは楽をすることではないが、「楽しく生きる」と楽になってくるのだ……、ということでした。

本日の聖書は、「マタイによる福音書」の「山上の説教」と呼ばれる部分の一部です。ここは「思い悩むな（思い煩うな）」という小見出しがついてまして、先程引用した話と同じく、私たちは常に何かにつけ思い煩っているけれども、そんな思い煩い、悩みから離れて「楽しく生きる」ことが肝要である、ということを私たちに教えています。冒頭の25節には「だから～」とありますが、これは直前の話の流れ、私たちは神と富との両方を主人として仕えることはできないのだという教えからつながっているものです。私たちはいつも金のことばかり考えてしまう。今日は何を食べようか、でも最近赤字が続いているから出費を抑えなければ、あの服だってすごくほしいけど……など。しかし私たちはそんなことばかり考えて、眉間にしわを寄せて下を向いて難しい顔をして思い悩むのではなく、喜びをもって神様を見上げていかなければいけないのだと。私たちに必要なものであれば神様はきっと私たちの前に備えてくださる。その信仰が私たちには必要なのだといっているわけです。

「空の鳥をよく見なさい」26節には書いています。これは「ルカ福音書」によると、カラスと書かれています。カラスは「レビ記」などにおいては、汚れた鳥の一つであるとされています。空の鳥は種も蒔かず、刈り入れもせず、蔵に納めもしない。それなのに天の父たる神様は鳥を養って下さるのだ。まして、汚れた鳥、忌み嫌われるような存在であるカラスでさえも、神様は養って下さるのだと。だから、私たち人間

は鳥よりも価値あるもの・優れたものなのだから、神様が私たちを支えて下さらないはずがないと。私たちが鳥よりも価値ある・優れているといっても、もちろんこれは人間のいのちの方がカラスのいのちよりも重いなどと言っているわけではない。種を蒔き、刈り入れをし、蔵に納めるという3つの仕事というものは、当時のパレスチナの農民の男性の代表的な日常の労働であったといわれているため、これは、鳥でさえ何もしなくとも生かしていただいているのに、日常的にあくせくと働いてがんばっている人間を神様が放っておくはずがないという、労働者に対するねぎらいと励ましの言葉として、私たちは理解していきたいものです。そしてカラスに対して見られるように、神様の深い配慮は特に弱い者や小さい者、貧しい者に向けられているのだということがここで示されているわけです。

だから、思い悩むな。思い煩うな。あれこれと思い悩んだところで、寿命がちょっとでも延びるわけではなかろう。これはある写本によると、「自分の身長」とされているそうですが、いずれにせよ、思い悩んだところで、身長が伸びるわけでもないし、長生きするわけでもないのだ。

続いて聖書は、野の花がどのようにして育つのか、注意して見なさい、よく学びなさい、といいます。注意して見なさい、よく学びなさい、というところが大事かもしれません。空の鳥は、神様に養われているにしても、自分で食べ物を取りいのちをつないでいるわけです。種を蒔き、刈り入れ、蔵に納めるわけでなくとも、鳥は鳥なりに必死に生きている、それに比べてプータローのオレは鳥にも劣っているのでは……と思う人もいるかもしれない。いやいや、でもね、それでは野の花をじーっと観察してみなさい。野の花は生きるためにそこから動き回るわけでもなく、もちろん働きもせず、紡ぎもしないではないか。それは神様が同様に野の花をも支えておられるからなのだというわけです。この野の花において言われている「働きもせず、紡ぎもしない」というのは、当時の女性の労働、特に結婚した女性の重要な義務労働になぞらえたものであるそうです。働きもせず、紡ぎもしないこの野の花、今日は生えていても、明日は炉に投げ込まれるかも知れないはかないいのち、弱い存在である野の花でさえも、神様はいつも明るく照らし、あるときは恵みの雨を降らせ、美しく装って下さるのだ。だから、あなたたち女性たち、イエスはここでは女性たちに語りかけておられたのであろうと思いますが、あなたたち女性たちも、なおさら神様が守ってくれないはずがないのだと、そうイエスは一生懸命生きている女性たちにお墨付きを与えて励ましているわけです。栄華を極めたソロモンでさえも、美しさではこの花の一つほどにもかなわないのだ。ソロモンの栄華については、「列王記」

上10章の「シェバの女王の来訪」という箇所に見ることができます。「シェバの女王は主の御名によるソロモンの名声を聞き、難問をもって彼を試そうとしてやって来た。彼女は極めて大勢の随員を伴い、香料、非常に多くの金、宝石をらくだに積んでエルサレムに来た。ソロモンのところに来ると、彼女はあらかじめ考えておいたすべての質問を浴びせたが、ソロモンはそのすべてに解答を与えた。王に分からない事、答えられない事は何一つなかった。シェバの女王は、ソロモンの知恵と彼の建てた宮殿を目の当たりにし、また食卓の料理、居並ぶ彼の家臣、丁重にもてなす給仕たちとその装い、献酌官、それに王が主の神殿でささげる焼き尽くす献げ物を見て、息も止まるような思いであった」。ソロモンは知力も財力も権力も、全てを完璧に兼ね備えた王でありましたが、そんな全てが備えられているように思えるソロモンでさえも、この一輪の花の美しさにはかなわないのだというわけです。だから、あなたはいのちを神様に委ねておればいいのであって、あれこれ思い悩む必要はないのだ。とにかくあなたが働いていようがいまいが、神様にはそんなこと関係ないのだ。神様はあなたを大事に思っておられる。いちいち悩むな！ 神様を見上げよ！

まあこのようにざっとこの箇所を見てきたわけですが、しかしそれでも納得のいかないこともあるかもしれません。神様に委ねて、自分があれやこれやと思い悩む必要はないということは一応分かってはいるけれども、でもしんどいものはしんどいのだ。どうしてもそう思ってしまう時もあるでしょう。それは私もよくわかります。ただ、イエス・キリストが言われるように、私たちは時に空の鳥や野の花にあえて目を向けることも必要かもしれません。空の鳥や野の花に目を向けることは、現在自分が抱えている思いわずらいから一歩離れて、この世を造られた神様の存在・この私をつくられた神様の存在に思いをはせることです。そしてそれは、自分たちが神様に包まれていることを感じることであり、自己中心的だった自分の思いにとらわれていたところから解放されることでもあるのです。

「週末だけのスローライフは本物ではない」という意見もあるようですが、そんなものは放っておけばいいんです。いつもスローライフを実践できていなくとも、「ゆっくり」「小さく」「続けられる」ことを大事にして、時々でも思いわずらいから思い切って離れ、神様に思いを馳せ、「笑って暮らし」「楽しんで生きる」ことができるならば、その人それぞれのスローライフのあり方として有効ですよ。そのような神様と共にあるゆっくりした生活を、時々でもいいから、私たちはもちながら日々をすごしていきたいと思います。